Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

第4号

SPRING

1999

発行◎平成11年2月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel.・Fax 095-823-4278

What's Delegative Project

派遣事業

●会長・副会長セミパラチンスク訪問
●韓国における被爆者医療視察
（平成10年度 韓国医師受け入れ研修事業フォローアップ調査）

Reports
南米派遣事業報告

Doctor's Works
放射線影響学会報告 ～公開セミナーについて～

New Face
新任教授紹介!! 長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設 放射線障害解析部門放射線疫学研究分野 柴田 義貞 教授

Letter Box
［チェルノブイリ事故から13年］

News
平成10年度 外務省補助事業について

セミパラチンスクを訪問された会長、副会長一行

What's Delegative Project

「派遣事業」ってなあに？

会長・副会長 セミパラチンスク訪問

昨年9月に、NASHIM会長である井石哲也長崎県医師会長と、副会長である池田高良長崎大学医学部長（現長崎大学学長）がカザフスタン共和国を訪問されました。

これまでにも、チェルノブイリを中心に、セミパラチンスクや韓国（下記参照）などに医師や専門家を派遣してきましたが、今回は、セミパラチンスクで行われた「第2回国際放射線・環境学会」に出席し、同時にこれまでの受入研修生のフォローアップ調査を行うのが派遣目的でした。

学会は9月16日から9月18日までの3日間にわたって行われ、カザフスタン、ロシアの専門家はもとより、長崎大学からは同行した山下俊一教授が長崎発の国際ヒバクシャ医療協力についての講演を行って注目を集めたほか、現在セミパラチンスクにおいてヒバクシャの聞き取り調査を行っている元大阪大学医学部の高木昌彦先生が、調査報告についてカザフ語で発表を行うなど、連日活発な討議が行われました。また、池田副会長が講演の座長を行ったほか、井石会長もNASHIM会長として紹介され、盛んな拍手を浴びました。更に井石・池田両先生は、セミパラチンスク医科大学の創立45周年記念式典において、名誉博士号の授賞という光栄を浴しました。

またアルマトイでは、第2回永井隆平和記念・長崎賞を授賞したサイム・バルムハノフ博士や昨年度NASHIMで出版した「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」をバルムハノフ博士と共に記したアチャバロフ博士とも対面し、今後の協力関係等についての話し合いを行いました。

現在長崎大学とセミパラチンスク医科大学は姉妹校の関係にあり、今後学術交流や人的交流を含めた様々な分野での交流が期待されています。また本年はセミパラチンスクでの第1回核実験から50年という節目の年にあたり、NASHIMとしても何らかの形で貢献をしていきたいと考えています。

派遣事業

派遣事業とは、「世界の被災地で放射線ヒバクシャの治療にあたる医療従事者に対する指導、技術支援、医療情報などの提供を行うために海外への専門医師等の派遣を行う」ものです。

韓国における被爆者医療視察

（平成10年度 韓国医師受け入れ研修事業フォローアップ調査）

韓国の医師研修受け入れ事業をさらに発展させるためには、韓国の被爆者医療の現状を知る必要があると考え、平成10年8月17日～19日、長崎県より豆谷参事、長崎市より南條次長、医学部より朝長教授の3名が視察旅行を実施しました。

まず、ソウルでは、大韓赤十字社で、朴基論事務総長、朴英煥原爆福祉事業所長と約30分面談、被爆者の医療の現状をお聞きしました。特に医療費の支給に重点が置かれており、ハプチョン（陜川）の原爆福祉会館は赤十字直轄で運営されています。

つぎに大韓赤十字社ソウル赤十字病院を訪問。文明善院長、安倫成副院長、李昌鉉、安泰義、姜永済医師らと面談しました。3医師はこれまでに長崎にこられた方々であり、久しぶりの再会で、話は尽きませんでした。

ソウルを離れ、ハプチョンへ移動、原爆福祉会館の白南珍館長以下の職員の出迎えを受けました。定員80名の福祉会館は満員でした。

やはり原爆症と自分の現在の病状の関係について悩む人が多く、また、自分の子供たちに原爆症がでる可能性を質問する人もあり、原爆後障害についての正しい知識の普及が必要と感じられました（長崎でもそうですが）。健康管理は現在はハプチョン保健所の文稗皓医師（専門は泌尿器科）が週数回来所して、常勤の看護婦、理学療法士と協力して行っています。文医師は30歳で、日本語を学んだ方で会話が弾みました。白館長は前に訪問した長崎の原爆ホームを再度訪問して、勉強したいと話されました。今後は、赤十字病院の医師とともに、現場で働いている医療従事者の受け入れが重要と認識しました。また積極的にNASHIMから毎年同福祉会館へ医師を派遣して、検診、カウンセリングを行えば、今後の事業を充実させることができると思いました。

ソウル赤十字病院にて　［左から宋医師（平成8年度）、文病院長、朝長教授、李医師（7年度）、姜医師（9年度）、豆谷参事、南條次長］

Doctor's Works

放射線影響学会報告
～公開セミナーについて～

講演をされる奥村教授
（長大医学部 原研放射）

日本放射線影響学会が昨年（平成10年）、長崎市で開かれました。そのプログラムの一つとして、市民公開セミナー「もっと知ろう放射能」が12月2日、プリックホールで開かれました。このセミナーは長崎市民に放射能や放射線のことを身近なものとして理解していただこうと企画したものです。講演は長崎大学の原研および放射線科の5人の先生によって行われました。内容は、私共が住む自然界には、生命が始まって以来、自然放射線があり、生きるかぎり放射線とは無縁でいられないこと、そして、放射線は医療において病気の診断や治療に役立っていることがわかりやすく話されました。特に、白血病の治療は放射線照射と骨髄移植によって行われ、白血病も不治の病ではなくなってきていることが紹介され、聴衆の関心を引きました。セミナーの参加者は187名であり、講演後の質問も活発でした。人に害を与える放射線を避け、役に立つ放射線と共存していく必要のあることが話題となりました。

New Face 新任教授紹介!!

長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設
放射線障害解析部門放射線疫学研究分野

柴田 義貞 教授

平成8年4月の改組に伴い原研に放射線疫学研究分野が新設され、柴田義貞先生が平成10年12月に初代教授として就任されました。柴田先生は東京大学工学部を卒業後、大学での研究、教育に携わってこられましたが、とくに医学における統計活用に興味をもたれ、医学統計の著書も執筆されています。その後、水俣病研究センターでは水俣病患者のデータベース構築を、放射線影響研究所では被爆者コホートの疫学研究および笹川プロジェクトでの国際医療協力に関するデータベース構築に携わってこられました。教育および研究ともに長崎大学とは縁が深く、平成2年から公衆衛生学の非常勤講師として医学部学生の教育にも貢献されてきました。また原研の先生方が国際医療協力をされているチェルノブイリ原発事故後の研究プロジェクトでは、健康調査に関するデータベース構築技術支援のため、ロシア、ベラルーシ、ウクライナに度々でかけられています。この2月から、長崎大学が世界のヒバクシャの情報収集および世界への発信基地となることを目的として、原研施設に国際ヒバクシャ学術情報交換システムが設置されます。よりよいシステム作りがヒバクシャの疫学調査研究の発展につながるとのお考えで国際ヒバクシャデータベース構築に力を注がれています。ますますの疫学研究発展が期待されます。

Reports 研修レポート

南米派遣事業報告

日本赤十字 長崎原爆病院内科　早川　滉

平成10年度の本事業に長崎県の派遣医師として10月22日成田を出発し、ブラジルを中心としてボリビア、ペルー、パラグアイ、アルゼンチンを廻り、11月5日に帰国しました。

被爆者の各国における実際の生活、健康状態を各人30分以上かけて、事務系の人も加わって把握し相談に応じました。

また現地の人の要望もあり、長崎関係の被爆者は私ができるだけ相談に応じましたが、事務関係は広島県からのみの派遣であったので、健康相談以外にも手帳の交付、健康管理手当、認定、来日診療の詳細などを厚生省の方と相談に応じました。相談の内容は予想していた以上に（私の現地の実情の理解をはるかに越えていた事情もありますが）きびしいものが感じられました。本邦から一番距離の離れた地域（ジェット機で26時間）であり、若い頃はなんとか生活のため、日本のためという情熱で乗り越えてこられた不安も、被爆50年という年月は肉体の加齢という現実があり、人生をふりかえり、将来に対する我が国（母国）への希望を熱くのべられていたのが印象深く感じました。

医療事情は極端に低く、かつ医療費は生活レベルに比して割り高、国民皆保険もなく、被爆者手帳を有していられても、医療費は個人負担であり、せめて本土（日本）なみにして欲しいとすべての人が声をそろえて訴えられていました。

サンファン地区の人々との記念写真

私はさらにボリビア、ペルーへと訪れましたが、ボリビアの被爆者は長崎関係の方々ばかり8人、サンファン地区から領事館のあるサンタクルスに出て来られ、お元気でした。また、この地区は長崎県の援助で診療所も立派に完成しており、今回は道路事情で現地まで行けず残念でしたが、二世の1人が日本でナースの資格（長崎県の援助）をとられ御活躍であるとの情報を聞き、ほっとして帰国しました。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信 なしむ 第4号 SPRING1999 発行◎平成11年2月1日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 〒850-8570 長崎市江戸町2-13(長崎県原爆被爆者対策課内)Tel.・Fax 095-823-4278

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

(長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。)

チェルノブイリ事故から13年

広島大学 大学院生(研修事業通訳担当)
セルゲイ・ボブコフ さん
(Segei Bobkov)

今年4月で、チェルノブイリ事故から13年になります。その事故で沢山の人が亡くなって、沢山の人が放射能の影響を受け、健康を失いました。その事故の一番恐ろしいことは、13年を経ても、放射能の影響が無くならないことです。地下水、土壌、植物、その植物を食べている牛などは、今でも放射能に汚染されています。汚染された地域では、数百万人が住んでいて、放射能の影響が続いています。放射能は人間の体に溜まって、いろいろな被害を与えて、病気をもたらしています。

ソ連が崩壊してから独立国家になったロシア、ベラルーシ、ウクライナは市場経済への移転時期にありますので、チェルノブイリが生み出している問題を解決するには自分の力と知識が足りない、人的・物的なリソースが足りない状態が続いています。

その状況の中、現地で非常に大きな貢献をしているのは被爆の経験を持っている長崎です。その活動の中心になっている長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)は長崎から現地へ放射線医学専門家を送ったり、放射能と医療問題についてロシア語で本の出版をしたり、長崎でチェルノブイリのため、人材育成と技術移転の研修を行っています。文化の違いなどがありまして、難しい仕事だと思いますが、チェルノブイリ被災者にとって、日本からの援助がとても大きな意味を持っていると思います。その高潔な活動に関係されているNASHIMの方々のご成功とご健康を祈っております。

Schedule

今後のスケジュール

2月14日～20日
バルナウル医科大学
ヤコブ・ショイエ教授来崎
(本文参照)

2月24日(水)
運営委員会

3月8日～19日(予定)
韓国医師受入れ研修(独自事業)
権貞兒医師・文昶皓医師来崎

3月15日(月)
理事会

編集後記

「なしむ」第4号では、昨年9月のNASHIM会長・副会長のカザフスタン共和国訪問及びNASHIMの派遣事業についての特集を組みました。現地に赴くと、チェルノブイリもそうですが、カザフスタンでも、徐々にではありますが、NASHIMのこれまでの地道な努力が確実に評価されつつあることを実感させられます。今後もNASHIMは、「長崎から世界へ」をモットーに、世界のヒバクシャのために貢献していきたいと考えています。皆様の御支援をよろしくお願い申し上げます。

News

平成10年度

外務省補助事業について

昨年度の甲状腺ロシア語教科書「Thyroid;Fundamental Aspect」の出版に続いて、平成10年度の外務省補助事業として、「ロシア・南アルタイにおける放射線障害の実態調査支援事業」が決定しました。

本号にもあるセミパラチンスクの核実験は、カザフスタン国内だけでなく、隣接するロシア連邦アルタイ州南部にも放射能汚染をもたらしました。しかしながら、この地域における放射能汚染の実態は、これまでほとんど表に出ることはありませんでした。

今回の補助事業では、アルタイ州における放射線降下物による被曝状況の実態を調査し、今後の共同研究や医療支援の可能性を探ると同時に、甲状腺用の超音波装置(エコー)を供与する目的で、まず昨年12月に長崎大学医学部の高橋達也助手(衛生学)と高村昇助手(原研国際)の2名が現地を訪問しました。

アルタイ州は南シベリアに位置し、冬には最低気温が−40℃にも達することもあるという、厳しい条件の中での派遣事業となりましたが、実際訪れてみると、現地では当初の予想を上回る規模での医療対策が行われており、ハード、つまり医療機器の導入という面でも、カザフスタン共和国に比して遥かに充実していました。またヒバクシャに対する検診体制や疫学調査も、カザフスタン側に比べてかなり詳細に検討されています。一方、例えば遺伝子レベルでの放射線の影響といった研究分野に関してはまだまだこれからで、この分野での今後の共同研究が期待されます。また、ヒバクシャの検診活動も積極的に行われており、この分野での医療協力が可能であると考えられました。

アルタイ州立診断センター(バルナウル市)にて
[右から高村助手、高橋助手]

本年2月には現地の責任者であるヤコブ・ショイエ教授が来崎し、NASHIMや長崎大学との共同事業及び共同研究について具体的な話し合いを行う予定です。